



地元のダイビング業者、な問題になり、そのたびやホフンティアの人たちは駆除に立ち上がった。本県でも遅まきながらオニヒトデ対策会議を立ち上げ、対策に乗り出した。しかし、駆除事業は実施期間が限られていて、そのための予算はもう使い果たしたという。

多くの人手と経費が投入された。例えば七〇年からの十四年間に約六億円が使われ、およそ千三百万個体のオニヒトデを駆除している。しかし、ごく一部を除いて、琉球列島全域のさんご礁が荒廃したから、結果としてオニヒト

オニヒトデは生まれたかかわっていることをうた。オニヒトデが多見られる浅いさんご礁は普通に通の船では近寄りづらいから、船外機付きの大型ゴムボートがたぐさん必要である。薬剤や生物資材による駆除についても、もっと検討されてよいように思われる。

問題は、駆除が単年度事業で地元の町村には経費がなく、結局はあなた任せの状況にあることだ。ダイビング業者や漁業協同組合にお願いしま

沖繩のさんご礁にまたオニヒトデが大発生している。昨年七月ごろから阿嘉島臨海研究所のある慶良間列島ではサンゴの被害が目立ちはじめ、既に70%ぐらいが食い尽くされた場所もある。



大森 信

オニヒトデ駆除は長期展望で

県にはオニヒトデ担当の係もないし、専門家もいない。基地問題には真剣さを見せる人たちも海の中の問題については歯がゆいばかりである。

五年前の白化現象から

ようやく回復の兆しを見せはじめていたのに、今年

の六月にはサンゴの産卵量が激減するかもしれない。

沖繩ではオニヒトデによるサンゴの被害が一九六九年以降しばしば大き

デ対策は失敗に終わったといえよう。

南西諸島ではここ数年、常にどこかで高密度

その原因には、駆除のための予算づくりが遅れたことや、個体数あたり

の集団が見つかったり、大発生を助長する何らかの人為的要素、例え

たことや、個体数あたりの買い上げ制を取り入れたため、とり上げが密集

て卵や幼生がばらまかれていたりすることか、海水の富栄養化によって幼生の

域に偏り、とり残しがた

くさん出たことなどが指摘されている。

広がアイデアを募っている。

もっと効果のよいもの上(阿嘉島臨海研究所

ているが、昼間はサンゴの下に隠れているので見つけにくいし、狭いすぎ

間から取り出そうとして、要課題と位置づけ、定期的なモニタリングを含め

略を打ち出す必要がある。